

## 「補綴再製をなくすためのアナログとデジタルの視点、その臨床」

佐野 隆一

補綴再製をいかになくすか？というのをテーマに今まで活動をしてきました。2018年に出版された拙著（『補綴再製をなくすための臨床テクニック 24』）が第3刷になり、“日常臨床のトラブルをなくしたい”、“良質な歯科医療を提供したい”というのは多くの歯科医師、歯科技工士の方々が思っていることなのだあらためて感じています。

この間、デジタルデンティストリーも普及してきました。私もデジタル技工が増えてきましたが、より良い補綴装置を提供するためには、やはりチェアサイドとラボサイドの連携はあった方がいい、というのはこれまでと同じです。チェアサイドでもデジタル機器を導入することで補綴装置は作れるようになってきましたが、ラボサイドが携わると何が違うのか、ラボサイドと連携をとるには何がポイントになるのかをお互いに理解していると、補綴のクオリティはこれまで以上によくなるでしょう。

そこで、まずは「補綴再製をなくすためのアナログ視点」として、印象や模型、咬合採得についてお話しさせていただきます。寒天アルジネート印象で精度の高い補綴装置を作るためにはどうするのか？ シリコーン印象でも不適合な補綴装置ができるのはなぜか？ 咬合調整を減らすためのポイントはなにか？ すべての臨床がデジタルになるわけでもなく、しかし多くの情報はデジタルになってきている今だからこそ、チェアサイドとラボサイドで共有しておきたい内容です。

また、「補綴再製をなくすためのデジタル視点」として、現在取り組んでいるデジタルの臨床も合わせて紹介させていただきます。デジタルだからこそ気を付けたいポイントはなにか？ スキャンの誤差に対してどう対応しているか？ アナログを活かしたデジタル活用とはどういうことか？ まだまだ確立された手法ではありませんが、この試行錯誤が参考になればと思います。

最後に、「日常臨床でのケースプレゼンテーション」として、うまくいったことや失敗したこと、うまくいけではないけれど役に立つだろうと思うことを紹介していきます。その中で、どのような技術で、どのようなコミュニケーションをとっていくのか？ というのは、チェアサイドとラボサイドの信頼関係を高めるだけでなく、確実に医療の質を高め、付加価値をつけていくものになるでしょう。

補綴再製をなくすというのがテーマではありますが、そこに関わる技術とコミュニケーションを通じて、デジタルだけではなしえない、歯科技工士という“人”が関わる意義を共に考えていければ幸いです。